

情報発信と地域連携の「広場」 道の駅「ひがしかわ『道草館』」(東川町)

上川郡東川町の道の駅「ひがしかわ『道草館』」は平成16年指定。多くの「道の駅」が集客を競うレストラン・食堂がなく、立地も国道ではなく道道である。それでも東川町の情報発信拠点、大雪観光のゲートウェイとしてまちづくりに欠かせないものとなっている。「道の駅」がまちづくりに果たす役割について松岡市郎町長に伺った。



道の駅「ひがしかわ『道草館』」



東川町長 松岡 市郎氏

■インフォメーションセンターとして出発

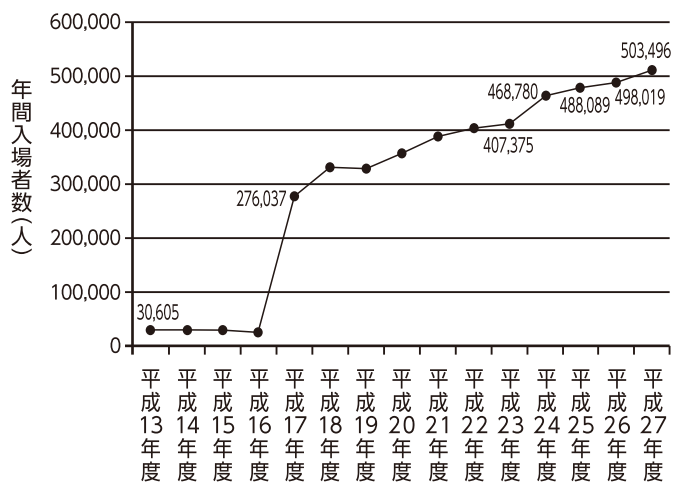
旭川市から道道1160号旭川旭岳温泉線を東に車で約30分。田園地帯を過ぎ、美しい街路樹が見えてきたら東川町の市街である。人口約8100人。大雪山系旭岳を有する観光と農業の町。道の駅「ひがしかわ『道草館』」は市街の中心、東川町東町のまさに1丁目1番地にある。バロック風の支柱が印象的で、明治大正期の洋館を思わせるしゃれた建物だが、もともと「道の駅」として建てられたものではなかったと松岡市郎町長は言う。

「平成12年に街中の活性化を図ろうと、観光情報、イ

ベント情報、街の情報などの発信拠点としてインフォメーションセンターをつくりました。その後、たまたまこれを見た道庁の職員さんから『道の駅』にしてはどうですか、とご提案があり、北海道が駐車場を整備し、平成16年に『道の駅』の指定をいただいたものです。『道の駅』になってから入場者数の伸びが好調で、翌年には実に約10倍となりました。私どももここまで活性化するとは思いませんでした」

インフォメーションセンターの開設初年度(平成13年度)入場者数は3万605人。平成16年度まで横ばいで推移していたが、「道の駅」に指定された平成17年度の

統計では一挙に27万6037人を記録している。そこからさらに増え続け平成24年度は46万8780人、27年度はついに50万人を突破した。



年間入場者の推移

「インフォメーションセンターとして作られたものなのでレストランがありません。このことが結果的に良かったと思います。『道の駅』の職員が周辺の飲食店を紹介し、お客さんもさまざまなものが食べられるし、周辺の店も潤う。うちのまちで行列ができる店は想像できませんでしたが、今はお客さんが並ぶ店もできています。そうしたにぎわいに誘われて、おしゃれなカフェやレストランなどが街中に生まれています。平成24年、『道の駅』の隣にアウトドアショップ『モンベルひがしかわ店』がオープンしたことによって『道の駅』の入場者はさらに6万人増えました。



館内の休憩スペース。壁にはアンティークカメラのコレクションを展示



平成28年3月発売の『東川スタイル』と同年7月発売の『東川町ものがたり』。東川のさまざまな魅力が詰まった2冊

中心市街地活性化のためにつくったインフォメーションセンターでしたが、当初は人の動きを作り出すことが難しかった。『道の駅』指定によって街中ににぎわいが生まれ、モンベルなど民の活力が引き寄せられていきました。それらが相乗効果を生み、さらに新しいものを呼び寄せる好循環が生まれています」

■世界に開かれた東川

街中ににぎわいを作り出したという道の駅「ひがしかわ『道草館』」。しかし、インフォメーションセンターが道の駅に指定されただけで、にぎわいが生まれたわけではない。そこには絶え間ない情報発信の努力があった。

道の駅「ひがしかわ『道草館』」の情報発信を担っているのが1階に事務所を構え、管理運営を行っている「ひがしかわ観光協会」のスタッフだ。旅行・売店担当、広報・売店担当、経理・売店担当がそれぞれ1名、売店担当が3名という体制。なかでも広報・売店担当として常勤している職員は英語ガイドを行うことができる。これらの職員が手づくりで発行している「ひがしかわ 家具とクラフト いろいろお店マップ」は、英語、中国語、台湾語、韓国語、タイ語の5カ国語に及んでいる。さらに観光協会が発行している旭岳や温泉を紹介したパンフレット、宿泊情報やロードマップをはじめ、ホームページ、フェイスブックなどでも多言語による情報発信が盛んだ。これらの取り組みから道の駅「ひがしかわ『道草館』」は日本政府観光局(JNTO)が認定する外国人観光案内所「カテゴリー1」施設の認定を受けている。

協会が発行している旭岳や温泉を紹介したパンフレット、宿泊情報やロードマップをはじめ、ホームページ、フェイスブックなどでも多言語による情報発信が盛んだ。これらの取り組みから道の駅「ひがしかわ『道草館』」は日本政府観光局(JNTO)が認定する外国人観光案内所「カテゴリー1」施設の認定を受けている。

「お店マップはインフォメーションセンター時代から職員が手づくりしています。最初は年に数回の更新でしたが、最近では新しいお店が増え、週一回の更新になってい

ます。手づくりの温かみが好評です。英語ガイドは道の駅の職員の他に、役場には常時、6~7カ国・12~13人の外国人職員がいますし、地域おこし協力隊として都会から来た方も英語が堪能で商工振興に貢献してもらっています」

この充実した国際対応は東川町がすすめている国際化の取り組みと大きく関わっている。平成27年10月、東川町は自治体としては初めて町立の日本語学校を開設した。「人口増加策を国内だけで考えても奪い合いになるだけですし、そもそも東京や札幌にかないません。ところがアジアに目を向けると、日本に対する関心が高く日本語を学びたい人たちが大勢います。私たちの町には介護福祉専門学校がありますから、日本語学校で日本語の1級・2級を取得してもらった後に専門学校で介護資格を取得してもらう。田舎は介護施設があっても働き手がないのが悩みですから、こうしたところを外国人の方に支えてもらいたい。そうしたねらいで日本語学校をつくりました。外国人留学生は150名ほど。最新の人口統計で3.3%の人口増を見ましたが、そのうち2%は外国人です。外国人留学生は数年で町を離れますが、日本語学校があることで回転していけば安定した人口となります」

東川町では、町立日本語学校と学校法人北工学園旭川福祉専門学校を拠点とする、外国人受け入れ政策をすすめている。その中で、道の駅「ひがしかわ『道草館』」は町内に居住する外国人の情報拠点になることで世界に開かれた東川のまちづくりを支えている。

■今までなかったコミュニティの広場

休憩機能、情報発信機能と並ぶ「道の駅」の三大機能の一つ「地域との連携機能」はどうだろうか。

「特産品展示販売コーナーは観光協会の会員が出店しています。観光協会の会員は町内に限りませんが150の会員がおり、そのうちおよそ100の会員が出店に関わっています。出店者に求めているのは、地元産品を出すこと、賞味期限、品質基準を厳格に守ること、品切れを起こさないこと、新製品を出してもらうことです。単なる物販の場ではなく、特産品を通じたまちのイメージアップにつなげたいからです」

特産品展示販売コーナーでは、農産物・農産加工品、クラフト、パン、ポストカード、日用品・飲料・菓子類・手づくり雑貨が趣向を凝らして並べられ、野外のテントでは生鮮品が売られている。そのほとんどが東川町産と聞くと物産の豊かさに驚かされる思いだ。手書きで生産者の思いが添えられたポップ広告からは手づくりの温かみが伝わってくる。

特産品展示販売コーナーの隣は、写真の町東川らしく収集家から寄贈された貴重なアンティークカメラがずらりと展示されたコミュニティホールになっている。

「コミュニティホールは、写真展、物産展、家具の展示会など、土日は隙間がないほど利用されています。旭川市のコミュニティFM局が月2回、ここから東川の話題を発信する



特産品展示販売コーナー

3時間番組を行うんですよ。

私はこの『道の駅』を新しい`広場、と言っています。自治体を維持するためには三つの機能が必要だと思います。一つは、今住んでいる人たちが出て行かないようにするダム機能、二つ目は、わがまちの文化や素晴らしい景観に誘われた人びとが滞在し、通い合うハブ機能、そして三つ目に、ダムとハブが交わる`広場、としての機能です。コミュニティホールを中心に『道の駅』は今までなかったコミュニティの場、いろいろな人が集まる`広場、になっています」

配慮事項	理由
地元産品を優先	差別化(ひがしかわイメージ)
賞味期限・品質保持	イメージ保持
品切れ防止	いつも商品があるように
新しい商品の紹介	・マンネリイメージを排除 ・リピートの確保 ・売れたら販売業者は新たな商品開発をして持ってくる。

販売注意事項

■官民、地域、連携による魅力向上

レストランを設けず、情報発信と地域連携に重きを置いた道の駅「ひがしかわ『道草館』」。その背景には「東川町国際写真フェスティバル」「写真甲子園」の開催で知られる同町の写真によるまちづくりがある。東川町は昭和60年、世界でも例のない「写真の町」宣言を行った。

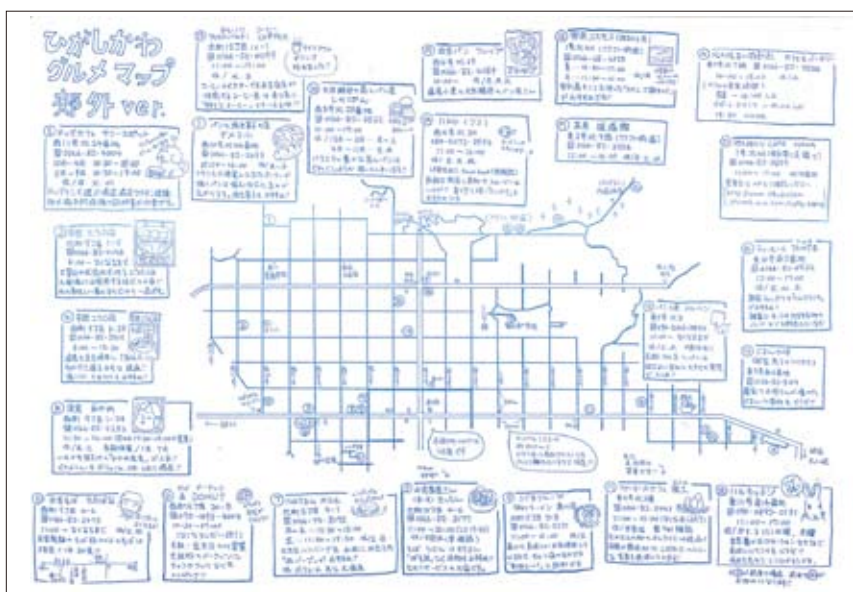
「先人は昭和60年に『写真の町宣言』を行うとともに『写真の町条例(写真の町に関する条例)』を制定しました。その第1条に『写真を媒体として、国際的な交流と写

真文化を通じ、世界に開かれた町づくりの推進を図る』と書かれています。宣言だけで終わらず、条例を作った当時の町長、議会は偉かったと思います。条例があるから、写真文化の振興と国際交流は、首長が変わっても続けなければなりません。文化は地方を元気にする力を持っている——。時の指導者には先見の明がありました。

現在『道の駅』から100mも離れていない東川小学校の移転に伴う旧校舎のリニューアル事業が進んでいます。2階に日本語学校と60人の宿泊施設、そして絵画、家具、デザインなど`大雪文化、を発信するアーカイブを設け、今『道の駅』にあるアンティークカメラのコレクションもこちらに移す予定です。

『道の駅』はまちの拠点ですが、拠点は複数設けるべきというのが私の考え。拠点と拠点が連携することで往来が生まれ、まち全体がギャラリーになるような発信力が生まれると期待しています。今整備中のものはまだ名前が決まっていますが、『道草館』に対して`写真文化創造館、といったところでしょうか。写真文化の中心、老若男女が集い、語り合い、学び、ものをつくる新しい`広場、です。『道草館』が発信し、受けとめた新しい風を`創造館、でかたちにする。将来的には連絡道路を整備し、二つ合わせてまちの顔にしたいと考えています」

写真の町・東川町の「道の駅」がインフォメーションセンターとして始まったこと、レストランを設けずに情報発信と地域連携に特化したことが、「道の駅」の持つまちづくりの拠点としての機能を際立たせたと言える。その勢いは東川小学校旧校舎が大きく生まれ変わる今秋、さらに高まるに違いない。



ひがしかわグルメマップ